

英語の強勢変異形出現における韻律の果たす役割

服部 範子
三重大学人文学部

1. 背景と目的

実際の社会で使われることばは必然的にヴァリエーション(variation, 変異)を伴う。本研究は進行中の共時的変異をとらえ、言語内的要因および言語外的(社会的)要因を分析することによって変化の原因とメカニズムの解明をめざす(社会言語学のうちの)変異理論の枠組み(variationist)で、現代英語において観察される強勢変異形(stress variant)の分析を行う(この枠組みについては中尾・日比谷・服部(1997)参照)。変異はしばしば単なることばの揺れとみなされるが、その現れ方を詳細に検討すると、私たちがことばを使うとき統語構造をどのように音声化しているのかについての手がかりが得られる。

本稿ではイギリス英語で主強勢の置き方に2通りあると文献(Wells 2000, Cruttenden 2001)で指摘されている形容詞について、イギリス英語母語話者21名の個人内変異、および個人間変異の分布の分析を通して明らかになった韻律の果たす役割について論じる。強勢変異形の出現には音声的要因と統語的要因の両方が関与していることを明らかにし、音声言語において韻律は一方ではその言語のリズムを整え、他方では統語構造を聞き手に伝える役割を果たしていることを示す。

音声的要因として強勢衝突(stress clash)を回避するための強勢移動(stress shift)を指摘し、統語的要因として形容詞が現れる名詞句が右枝分かれ構造をとるとき変異が起こりやすいことを指摘する。この構造は日本語において連濁が阻止される有標の構造であり、言語処理の観点から音声体系を異にする日英語に共通点が見出されることも指摘する。

2. データ収集方法

Wells (2000)に代表される発音辞典における単語の強勢の記載は、その単語が「文の最後の内容語」の位置にあるときの強勢を記述したものである。本研究では分節音の変異分析の手法(Labov 1972; 2001)を応用し、単語をさまざまな

音声的、統語的構造をとる文の中に置いて被験者に提示し、変異を引き出した。提示文の選定にあたってはコーパス(Bank of English)を用い、問題となる形容詞が高い頻度で現れる文を選択し、予備調査で明らかになった変異の出現に関与する諸要因(形容詞の叙述・限定用法、強勢音節間の距離、リズム、統語的構造、意味)を含む文に絞り込んだ上でそれらの文をランダムに並べ、英語母語話者21名に読み上げてもらうという方法をとった(詳細については服部(2003)参照)。

3. 強勢変異形

3.1 強勢変異形出現の要因

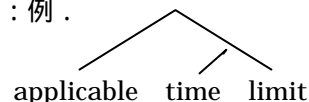
これまでに8個の形容詞(*applicable, communal, comparable, exquisite, formidable, justifiable, preferable, premature*)の強勢変異について分析を行ってきたが、強勢の置き方が2通り起こる環境として以下の要因を指摘する(服部 2003)。

(1) a. 問題となる形容詞が限定用法か叙述用法か：例 . prémature babies vs. It would be prematúre to discuss it at this stage.

b. 問題となる形容詞の前後にくる、強勢の置かれる音節間の距離：強勢のある音節同士は近すぎても(no clash)離れすぎてもいけない(no lapse) すなわち英語の好韻律性(eurhythmy)から外れないように強勢を置く；強勢衝突が起こりうる状況は強勢移動によって回避する：例 .

prémature ageing vs. *prematúre ageing
X x x X x x x *X X x

c. 問題となる限定用法の形容詞がとる名詞句の統語構造、とりわけ形容詞が右枝分かれ構造の姉妹接点(sister node)をとるかどうか：例 .



形容詞 *applicable* の第 2 音節に主強勢を置く (*applicable*) 被験者が上記のような構造の場合にのみ、主強勢を第 1 音節に移す (*ápplicable*) など、右枝分かれ構造のとき、変異が生じる傾向が他の形容詞においても観察される。

本稿では 8 個の形容詞のうち変異の分布の仕方 で 2 種類に大別できるそれぞれの代表として、*comparable* と *premature* の変異を取り上げる。文献ではこの 2 つの形容詞の強勢の置き方は次のように記載されている (* は文献で「正しい」発音とされていることを示す)。

- (2) *cómparable** ~ *compárrable*
 (3) *prémature** ~ *prematúre*
 [e](~[i:]) 59% 41% (Wells 2000)

変異の現れ方として、たとえば、話者 A はある形容詞 X の第 1 音節に常に主強勢を置き、話者 B は常に第 2 音節に主強勢を置く、という分布を示したとすると、この形容詞に関して個人内変異はなく、個人間変異のみが観察されたことになる。個人間変異のみが観察されたケースの代表として(2)を、個人間変異と個人内変異の両方が観察されたケースの代表として(3)を以下で取り上げる。

3. 2 個人間変異と個人内変異

3. 2. 1 *comparable*

個人間変異のみ観察されたこの形容詞に関して、被験者への提示文はこの形容詞の限定用法、叙述用法、および後置用法の 3 種類を含む合計 8 文であった。変異形の分布を示したものが表 1 で、21 名の主強勢の置き方は次のようにまとめられる。

- (4) *cómparable* ----- 9 名(内 1 名は 2 通りに言い直した)
compárrable ----- 12 名

本稿では詳細は省略するが、変異の分布と被験者の年齢との間にある程度の相関関係が見られる。

表 1 : *comparable* の個人間および個人内変異

	1	4	5	9	11	13	16	17	18	23	6	7	8	10	12	14	15	19	20	21
i	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
ii	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
iii	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
iv	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
v	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
vi	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
vii	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
viii	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

(表中の‘1’は *cómparable* を、‘2’は *compárrable* をさす。上段の数字は被験者番号を示す。)

3. 2. 2 *premature*

個人間変異と個人内変異の両方が観察されたこの形容詞に関して、被験者に提示した文(紙面の都合上、一部を省略)は以下の 8 文である。予備調査を基に、限定用法で単純な構造をとるものと右枝分かれ構造のもの、叙述用法で文末にくるものと直後に to 不定詞がくるものを用意した。

(5) 限定用法

- (i) Parents of premature babies are being given training to allow them
 (ii) Chronic ageing is predetermined But premature ageing can be stopped
 (iii) ... Prevent the premature wrinkling and aging that is caused by
 (iv) The long-term effects of a cloud ... include late spring and premature fall frosts.
 (v) He could apply for premature voluntary retirement.
 (vi) Emma and Amy are the world's most premature surviving twins.

叙述用法

- (vii) The final judgement was premature, but
 (viii) We have had a report ... but it would be premature to discuss it at this stage.

変異形の分布を示したものが表 2 である。

表 2 : *premature* の個人間および個人内変異

	5	9	12	10	18	14	11	17	20	12	4	8	13	3	19	16	6	7	15	21
i	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ii	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2
iii	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
iv	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1
v	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2,1	2	2	2	2
vi	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
vii	1	1	2	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
viii	1	1	1	1	1	2,1	2	2	2	2	1	2	2	2	2	1,2	1,2	2	2	2

(文中の ‘1’ は *prémature* を、‘2’ は *premature* あるいは二重強勢(double stress)をさす。)

この形容詞の強勢変異形において、(1b)と(1c)に挙げた音声的要因と統語的要因の相互作用が観察できる。すなわち、強勢の置かれる音節同士が隣り合っていないといけないという音声的要請((1b))により、(5)(i)のような文は、表 2 から明らかのように、他の位置では 2 型(主強勢を第 3 音節に置く)を示す被験者でも 1 型(主強勢を第 1 音節に置く)を示す。

(6) *premature* babies (= (5)(i))

X x x X x
x x *X X x

(5)(iv)のような文は、強勢衝突を起こす可能性があり、かつ右枝分かれ構造を示す。被験者は 1 名を除き、叙述用法(5)(vii)で 2 型を示しても(5)(iv)では 1 型を示した。

(7) [*premature* [fall frost]] (= (5)(iv))

X x x X X (20 名)
x x *X X X (1 名)

cf. ...judgement was *premature*. (= (5)(vii))
x x X (18 名)

ピッチの推移という観点からは、ここでは被験者は右枝分かれという統語構造を伝達することよりも、英語のリズムを整えることを優先したと考えられる。

4. 韻律と統語のインターフェイス

上で見た *premature* という形容詞における強勢衝突回避は、英語のリズムが語形の選択に及ぼす影響として指摘される以下の例(窪園 1998: 139; Bolinger 1965)を思い出させる。

(8) The baby was *asleep*.

(9) *Look at the *asleep* baby.

(10) Look at the *sleeping* baby.

ここで挙げた *asleep* という形容詞は(他に *drunk* や *alilve* など)叙述用法にのみ用いられ、限定用法はないので、(9)は非文法的である。形容詞が後続名詞を従えるときは(10)のように *sleeping* といった同義語に置き換えられる。この現象には以下に示したように強勢衝突回避が関与していると考えられている。

(11) (= (8)) ... was asleep.

x x X

(12) (= (9)) ... *the asleep baby.

x x *X X x

(13) (= (10)) ... the sleeping baby

x X x X x

ここで問題となる一連の形容詞は単音節語か語末音節に強勢のある 2 音節語であるため、語頭に主強勢か第 2 強勢をもつ割合の多い英語の名詞を修飾する位置に來ると、(12)のような強勢衝突を引き起こすことになり(窪園 1998)、Bolinger(1986)の言う緩衝音節(buffer syllable)が必要となる。

これは韻律が語形の選択に影響を及ぼす事例であるが、本稿で扱った *premature* という形容詞が叙述用法と限定用法で異なった強勢型を示すことも、この単語の語末音節に主強勢が置かれると常に後続の名詞と強勢衝突を起こす可能性にさらされることが変異形の出現理由と考えられる。

5. 統語的要因の日英語比較

右枝分かれ構造が強勢変異形を生じる要因となりうることをここでもう一度取り上げる。(1c)でふれた形容詞 *applicable* ではほとんど個人内変異が見られず、第 2 音節に主強勢を置く *applicable* が主流であった。しかし、個人内変異

を示した2名の被験者は、(1c)のような右枝分かれ構造の文(14)に再掲)においてのみ、*applicable*と発音した。

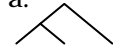
(14) ... within the applicable [time limit]]

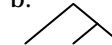
(限定用法で右枝分かれ構造)

cf. ... not applicable for emergency hospital services (叙述用法)

... any applicable law (限定用法で単純な[形容詞 名詞]という修飾関係)

右枝分かれ構造は日本語において連濁が阻止される有標の構造である。日本語で(15a)(16a)では連濁が起こり、(15b)(16b)では連濁は起こらないことが指摘されている(佐藤 1989; Otsu 1980)。

(15) a.  尾 白 鷺
おじろわし

b.  紋 白 蝶
もんしろちょう

(16) a. [ぬり はし] 入れ ぬりばし入れ
b. [ぬり [はし 入れ]] ぬりはし入れ

これは右枝分かれという特定の構造が連濁という音韻規則の適用を阻止しているケースであるが、窪園(1999)は同様のケースが他の言語においても観察されることを指摘し、以下のように述べている。

(17) 右枝分かれ構造という特定の構造を発音上示すために、連濁という音韻規則を阻止していることになる。この構造上の要請によって入力構造を忠実に守ろうとする力が強く働き、連濁という、発音を楽にしようとする同化の力に打ち勝っていると解釈できる。枝分かれ制約の働きを別の観点から見ると、連濁の有無が複合語の内部構造(枝分かれ構造)の違いを表すのに役立っているということもできる(窪園 1999: 141)

英語の形容詞の修飾する範囲がどこまでであるのかを伝えるための一つ的手段として有標の構造のときに、その他の文脈では使わない強勢型を用いるのではないかと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、文献において主強勢の置き方が2通りあると指摘されている英語の形容詞について英語母語話者を被験者とした実験の分析結果に基づき、強勢変異形の出現には音声的要因と統語的要因の両方が関与していること、そして、音声言語において韻律は一方ではその言語のリズムを整え、他方では統語構造を聞き手に伝える役割を果たしていることを示した。今後はとくに右枝分かれ構造において2種類の強勢型のピッチ曲線の違いだけでなく、語境界におけるポーズ(休止)の有無及び長さを調べることを考えている。

被験者はロンドン大学の学部生、院生、教職員で、録音はロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ音声学科の協力を得て行った。聴覚印象による音声判断についてはマイケル・G・アシュビィの協力を得た。本研究は平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(c)(2)課題番号15520310)および三重大学COE研究費による研究の一部である。

参考文献:

- Bolinger, Dwight (1965) *Forms of English*. Tokyo: Hokuou.
- (1986) *Intonation and Its Parts*. Stanford: Stanford University Press.
- Cruttenden, Alan (2001) *Gimson's Pronunciation of English*. 6th edition. London: Arnold.
- 服部範子(2003)『現代英語にみられる強勢変異形の社会言語学的分析』平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書.
- 窪園晴夫(1998)『音声学・音韻論』東京:くろしお出版.
- (1999)『日本語の音声』東京:岩波書店.
- Labov, William (1972) *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- (2001) *Principles of Linguistic Change, Volume 2: Social Factors*. Massachusetts & Oxford: Blackwell Publishers.
- 中尾俊夫・日比谷潤子・服部範子(1997)『社会言語学概論』東京:くろしお出版.
- Otsu, Yukio (1980) "Some Aspects of *Rendaku* in Japanese and Related Problems," *Theoretical Issues in Japanese Linguistics*, ed. by Yukio Otsu and Ann Farmer.
- 佐藤大和(1989)「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子(編)『日本語の音声・音韻』(上)東京:明治書院.
- Wells, John (2000) *Longman Pronunciation Dictionary*. New Edition. Harlow: Pearson.